

教育長 様

校番 94 呉商業 高等学校長  
( 全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る  
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校  
令和3年度 実施報告書**

**1 学校の教育目標等**

## (1) 教育目標

地域社会や産業界と体験的な活動を通して連携しながら、社会人として基礎となる力を育て、ビジネス界で活躍し、社会の発展や他者の幸福に貢献できる人材を育成する。

## (2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

将来は、産業界や地域社会の若手リーダーとして活躍することを目標とし、柔軟な発想と行動力をもって、主体的に学び、他者と協働しながら、困難な課題や夢の実現のために行動できる生徒を目指す。

## (3) 学科等の特色

商業科・会計科・情報処理科の3つの学科を設置しており、各学科でそれぞれの専門的な科目を学ぶカリキュラムとなっている。これまで呉商フェスタを柱に、販売実習やインターンシップ等の実践的・体験的な活動を通した学びを行ってきたが、昨年度から1学年で「ビジネス探究」に取り組み、今年度より2学年で新たに「起業家精神」を学ぶプログラム「ビジネス探究E E」を実施している。その学びを3学年の「課題研究」に繋げ、地域の様々な課題を自分ごととして捉え、ビジネスの視点をもった探究活動を行う。課題解決のためのビジネスプランを考えていくことを通して、課題発見力・解決力、情報収集力・活用力、データ分析力・活用力、協働力、論理的思考力、価値創造力、表現力といった資質・能力を身に付け、未来に向けて必要な自分らしく社会に参画していく生徒の育成を目指していく。

**2 研究の概要**

## (1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

- ① 「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」において段階的に資質・能力を育成する探究学習プログラムの開発を行う。特に「課題研究」においては、地域の方々や広島大学と連携し、「自分ごと」として考え、確かな根拠に基づき、論理的に思考しながら、新しい価値を創造する探究活動のカリキュラムを開発する。
- ② 目標・指導・評価の一体化の評価を行うために、各教科及び特別活動などすべての教育活動で育成したい資質・能力を明確化する。そして、観点別学習状況の評価の職員研修を通して、評価の観点やその場面が明確になるように取り組む。
- ③ 「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」の育成したい資質・能力と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップを作成する。

## (2) 3年後の目指す学校の姿

将来は、産業界や地域社会の若手リーダーとして活躍することを目標とし、柔軟な発想と行動力を持って、主体的に学び、他者と協働しながら、困難な課題や夢の実現のために行動できる生徒。

## (3) 令和3年度の目標

## ア アウトプット (活動指標)

- ・「課題研究」において、地域の方々と大学と連携したカリキュラム開発が行われている。
- ・「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」で育成したい資質・能力と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ・「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」について育成を目指す資質・能力についてそれぞれルーブリックを作

成し、毎時間1項目ずつ評価する。更に、月1回、生徒自身による自己評価を行い、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

- ・すべての教科において、育成を目指す資質・能力についての重点目標が設定できる。

#### イ アウトカム（成果目標）

- ・地域の方々と連携した学習活動を年2回実施する。
- ・「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」の育成したい資質・能力と各教科・科目との関連を示すための各教科での検討が2回実施でき、教科・学科主任会議で共有できている。
- ・アンケートの結果、他者とコミュニケーションを通して問題解決に取り組む態度が身に付いている生徒の割合が50%となっている。
- ・課題を発見し、筋道を立てて話し合うことができた生徒の割合が50%以上となっている。
- ・1学年（令和4年入学生）のシラバス改訂に観点別学習状況の評価が組み込まれている割合を100%とする。

#### (4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

##### ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

1学年は、ビジネス基礎2単位と情報処理2単位で通称「ビジネス探究」、2学年は「ビジネス探究 E E」、第3学年は「課題研究」とする。

##### イ カリキュラム開発の概要

マスターループブック作成については、令和2年度8月に校内研修会を実施し、本校生徒の現状を把握して生徒のあるべき姿の共通認識をもち、学校教育目標と学校経営計画を作成した。今年度は、11月までに昨年度作成した学校経営計画の見直しを行いながら、その目指したい生徒像に向かうために必要な資質・能力を育成していくマスターループブックを作成した。

具体的には、夏季休業中に職員研修を実施し、東京学芸大学名誉教授次世代教育研究推進機構特命教授岸学先生から、「資質・能力についての基本的な考え方」と「評価について知るために学習観点の意義や観点、各観点の評価に関する考え方の講話を受けた。それぞれの教育活動場面を想定し、育成したい資質・能力の中から1つ選び、ループブックを作成した。学びの探究部から教科・学科主任会議へマスターループブックと評価を提案し、各教科で意見を出し合い、その意見を教科・学科主任会議で集約し、最終的には学びの探究部で整理を行った。さらに、学校教育目標や育てたい生徒像を達成するために令和4年度入学生からの学科改編に伴うカリキュラム編成を行った。観点別学習評価についても、研修会を踏まえて、各教科が本校で育成をめざす資質・能力のうちで最も育成したい能力を定め、教科の資質・能力と掛け合わせながら、令和4年度入学生の単元テンプレートを作成することができた。

学校の教育目標や育成を目指す資質・能力の育成に向けては、「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」を核として、地域社会や産業界のリーダーとして活躍するために①自律して学ぼうとする力、②より良く問題を解決する力、③他者と協働する力、④夢や目標の実現に向けて計画的に準備を進め実行できる力を育成するカリキュラムの開発をおこなった。

具体的には、1学年「ビジネス探究」で商業を学ぶ意義や魅力を体感することにより、社会の出来事を自分ごととして考えてビジネスの学習を行い、協働力、表現力、多面的・多角的視点を育成するプログラムを実施した。第2学年「ビジネス探究E E」では、起業家精神（アントレプレナー）に必要な資質・能力をPBL学習で育成していくことを通して、Lean Canvasを作成し、独創的発想力、計画実行力、意思決定力・転換力、適応力、自己研鑽力、批判的思考力・コミュニケーション力を育成し、校内でのクラスピッチ、学年ピッチを経て、HYEC FirstRound, SecondRoundに出場し、WYEC大会へ進むことができた。第3学年「課題研究」では、呉サポートセンターと連携し、呉に愛着を持ち、呉の活性化や人との繋がりを大切にされている方、地場産業を支えておられる方、Iリターンされて地域活性化のために活動しておられる方の講話をうけて、生徒に多様な考えや選択肢があることを理解することを示し、課題発見力や協働力、表現力、価値創造力を育成することを行った。更に、広島大学大学院人間社会科学部教育科学専攻教師教育デザイン学プログラム准教授川田和男先生及び研究室の学生4名と毎時間オンラインで繋ぎ、生徒の研究の支援をしていただいた。1月末には、学習成果発表会を実施し、ポスターセッションを行い、グループで考えたこと、得た結果、そこから学んだこと等を自分たちの言葉で伝え、質疑応答や意見交換を行うことができた。

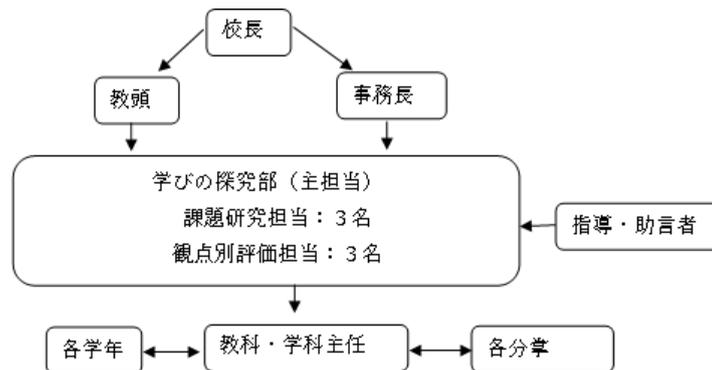
\*WYEC (World Youth Entrepreneurship Challenge) は、アメリカで実施されるビジネスモデルを発表する大会。

\*HYEC (Hiroshima Youth Entrepreneurship Challenge) は、広島県内の予選会で、上位3名がWYECの本戦に出場する。

## ウ 校内体制

カリキュラム開発を全教職員が参画して行うために、カリキュラムの核となる科目の内容を知ることが重要だと考え、毎週開かれる教科・学科主任会議において、「ビジネス探究」と「ビジネス探究E E」の学習内容を報告し情報を共有化した。特に、パフォーマンス課題を実施する際は、授業参観を促し、生徒の変容を確認した上で、各教科科目の指導に繋がるように促した。〔図1〕

また、学校の教育目標に関する理解度を高めるために、マスタールーブリックを作成するプロセスを大切にしました。校内研修会で先生方が話した内容や項目を学びの探究部で整理し、教科・学科主任会議で検討した。各教科からは、「レベル1とレベル2のステップアップの内容がどの程度アップしていくのかが再度検討する必要があるのでは」と「内容が重なっている部分については、資質・能力をどちらかにしてはどうか」など意見がでて、再度内容を検討した。各教科の視点で検討したことにより、学校教育目標の理解が深まった。



〔図1〕

## (5) 学習評価

カリキュラムの核である科目「ビジネス探究」「課題研究」については育成したい資質・能力を3点、「ビジネス探究E E」については育成したい資質・能力を8点、課題研究については3点に絞り（表1）、生徒と教職員が共有し、授業ごとにワークシートまたはグループ活動について、ルーブリックを作成して評価を行い、育成状況を見とり、課題の出し方やグループ分け、授業の進め方等に活用した。「ビジネス探究」「課題研究」の資質・能力の自己評価については、年3回実施した。更に、課題研究についてのマインドマップを作成させ、生徒の思考の変容を確認しながら進めていった。

「ビジネス探究E E」は、授業の開始時に、本時のマインドセットを確認して学習を進め、授業の振り返りの際も本時に設定したマインドセットはどのようにして発揮したかを記入させ資質・能力の育成に努めた。

1学年では、民間テストとして、Benesse のG P S-Academic を1年生全クラスに対し実施した。実施にあたり、職員会議で内容説明と今後各教科で評価指標の一つとして活用可能性を検討した。また、G P S-Academicの結果と「ビジネス探究」の評価とを比較し、どの程度、相関関係があるのかという観点から評価としての妥当性を検討した。現在、来年度、当該授業の評価に組み入れることが可能かどうか、検討中である。

〔表1〕 「ビジネス探究プログラム」育成したい資質・能力

科目	育成したい資質・能力		
ビジネス探究	表現力（書く・話す）	協働性	多面的・多角的視点
ビジネス探究E E	独創的発想力	計画実行力	自己研鑽力
	意思決定力	適応力	転換力
	批判的思考力	コミュニケーション力	
課題研究	課題発見・解決力	企画設計力	論理的・思考力

## (6) カリキュラム評価

学校評価アンケートは年2回実施した。その結果を受けて、各分掌や各教科で分析して、次へむけての取組内容等を校務運営会議で検討した。

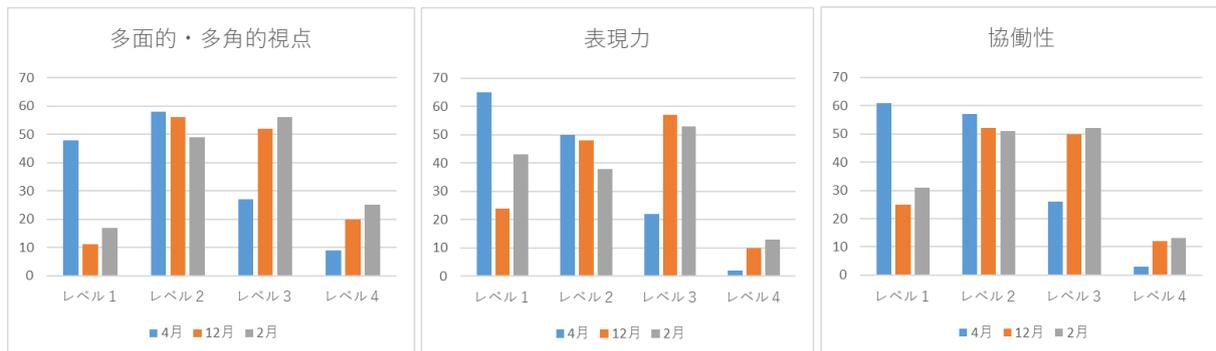
具体的には、「1学年「ビジネス探究」、2学年「ビジネス探究E E」、3学年「課題研究」の段階的な探究学習プログラムにおいて、「自己や他者の意見から課題を発見し、道筋を立てて話し合えるよう指導する。」の生徒評価の結果は、1学年45%、2学年16%、3学年55%だった。2学年が、極端に数値が低いので、2学期の初めに学年でガイダンスを開き、ビジネスアイデアを作り上げることやこの科目の目標、育成を目指す資質・能力を確認して取組んだ。その結果、数値は2日目のアンケートでは、8%上昇した。

### 3 令和3年度の成果及び課題

#### (1) 成果

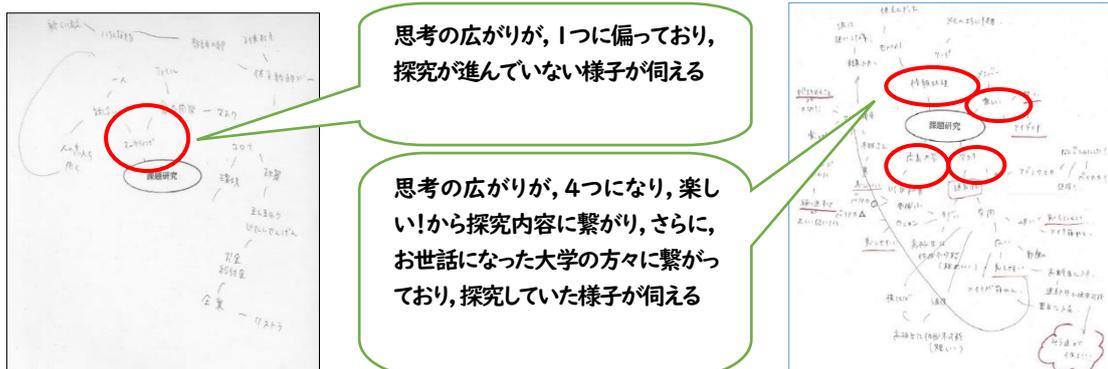
- ・マスターループリックづくりの成果としては、昨年度から生徒の実態を把握しながら、学校経営計画や育てたい生徒像を作成して、今年度マスターループリックを先生方と意見交換しながら進めた。そして、令和4年度入学生からの学科改編に伴うカリキュラム編成に基づく育てたい生徒像を共有しながら探究活動を軸として進めていけることができた。
- ・1学年「ビジネス探究」において「表現力」「協働性」「多面的・多角的」について、年3回生徒による自己評価の結果、いずれの項目についても4月当初より「レベル1」の生徒が減少して、「レベル3」が2倍に増加している。〔図2〕

「ビジネス探究」では、毎時間の学びの振り返りを大切に。授業の最後に200字または400字に記入させたレポートを分析したところ、企業の活動を学ぶ学習では、「会社は利益を上げることを目的にしている」と授業前に思っていたが、授業後には「社会貢献やお客様を幸せにする目的もあり、経営理念の必要性を考えた」と自分の学びの変化を記入した生徒もあり、仲間と協力して考えていった成果が見とれる。



〔図2〕

- ・2学年「ビジネス探究EE」については、8つの資質・能力が「身に付いた」と回答した生徒は80%以上であった。1年間のプログラムを終えて、「想像力を働かせることや自分のビジネスアイデアをうまくまとめて相手に伝える能力などが成長したと思いました」「将来について考えるようになった。理解力が上がった。」等の記述があったことから、生徒の資質・能力を意識した学びに成果があったと考えられる。更に、自身のビジネスアイデアを発表することができ、WYEC世界大会への出場者が決まった。
- ・3学年「課題研究」では、学校評価アンケートの「探究学習において、課題を発見し、解決のための話し合いができた」と評価する生徒は93%であった。資質・能力の自己評価は「課題発見・解決力」33%、「企画設計力」11%、「論理的思考力」16%と増加した。さらに、「課題研究」をテーマに3分間でマインドマップを作成しその変容を見とった。マスクの息苦しさからマスク開発を探究している生徒に着目してみると、7月の時点では、課題研究からの広がりやの道筋が1か所に偏っていたが、12月は、4か所の広がりから自分が考えたこと、研究で実験した内容、お世話になった方々へのお礼の言葉、1学年・2学年で学んだ情報処理を活用して研究した等の内容を記入していた。〔図3〕主体的に課題を設定し計画的に解決するために、自分たちの考えている内容を仲間や周りに相談しながら理論的に伝え、計画的に進めていく力が身に付いたと言える。そして、生徒の記述により成長を見取ることができると「これうれしいね。元気がでる」という話がでたりして、教職員のモチベーションも上がった。



〔図3〕

## (2) 課題

- ・マスタールーブリックについては、学校評価アンケートにおいて、「本校の教育方針や重点目標を知っている。」と回答した保護者は47%だった。約半数の保護者に対して本校教育目標が浸透しておらず、マスタールーブリックを生徒や教職員、保護者がわかりやすい表現に修正し、様々な場面や方法で周知して、同じ目標に向かって協力して取り組むようにする必要がある。
- ・3年間の「ビジネス探究プログラム」については、本校のカリキュラムと核となる科目に位置付いており、更に、他教科との関係性を可視化して、より教育効果を高める工夫をしていくことが課題である。
- ・2学年「ビジネス探究E E」について、自己評価アンケートにおいて「探究学習において、課題を発見し、解決のための話し合いができた」と回答した生徒が76%と他学年に比べて15%低い。理由としては、「ビジネス探究E E」の学習内容が、より専門性が高くかつ基礎的な学力が必要になってくるためと考えられる。1つの科目で補いきれない面も多く、基礎・基本の学力の習得と向上に向けた取組も必要となる。
- ・「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」については、毎時間、1つの観点とグループワークを2人と協力して評価を行った。生徒の様子をみとることができ効果的ではあるが、来年度はパフォーマンス課題等を活用して、単元ごとに見とれるによりよい評価方法を見直し、工夫する。

## 4 令和4年度の目標及び取組内容

### (1) 令和4年度の目標

#### ア アウトプット（活動指標）

- ・「課題研究」において、令和3年度から実施している地域の方々と大学と連携したカリキュラム開発の見直し・修正ができています。
- ・「ビジネス探究プログラム」の学習内容と、各教科・学科との関連を示したカリキュラム・マップを作成する。
- ・「課題研究」について令和3年度に作成した育成を目指す資質・能力についてルーブリックを修正・追加し、生徒の学習状況を適切に評価することができています。
- ・新1学年は、観点別学習状況の評価ができています。
- ・Benesse「G P S-Academic」を「ビジネス探究」で学習評価の一部として活用する。

#### イ アウトカム（成果目標）

- ・教科の枠を超えた活動を年2回実施している。
- ・「ビジネス探究」「ビジネス探究E E」「課題研究」で育成したい資質・能力と各教科・学科との関連を示したカリキュラム・マップが作成できている。
- ・他者とコミュニケーションをとって問題解決に取り組む態度が身に付いている生徒の割合が80%となっている。
- ・新2学年シラバス改訂に観点別学習状況の評価が組み込まれている割合を100%とする。

### (2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

#### ア カリキュラム開発の概要

- ・「ビジネス探究プログラム」の「課題研究」の学習内容を見直しを図る。具体的には、探究のプロセス【課題設定】→【情報収集】→【整理・分析】→【まとめ・表現】を2回実施することができるように年間指導計画を作成して、育成したい資質・能力を焦点化して取り組んでいく。
- ・「ビジネス探究プログラム」の学習内容と各教科との関連性がわかるカリキュラム・マップの作成を行う。具体的には、「ビジネス探究プログラム」の学習内容をまとめ、それに関係する他の教科の単元や学習内容を繋げていく。すべての教科・科目において核となるカリキュラムの学習内容を把握していくことにより、より、育てたい生徒像を視野に入れた学習活動ができる。
- ・1学年「ビジネス探究」の観点別学習状況の評価に Benesse の「G P S-Academic」を評価指標の一つとして組み込むように検討する。具体的には、令和3年度の結果を利用して、どの程度の割合で組み込むことが、生徒の資質・能力を測るうえで妥当かを検討して、実用化していく。
- ・マスタールーブリックについては、生徒と教職員と保護者がわかりやすい表現に変更して共通認識を図っていく。具体的には、学びの探究部で表現を検討し、教職員や生徒代表（生徒会や模擬「株式会社 呉商」）の意見を聴き、修正を行い実施する。周知の方法は、教科・学科主任会議や生徒代表の意見をふまえ、検討・実施する。実践していく。

イ 校内体制

学びの探究部を中心に、教科・学科主任会議と連携しながら、すべての教職員が主体的に参画できるように進めていく。